

健康な絵具。



発色が鮮やかなだけでは、よい油絵具とはいえません。粘度や固着力、耐光性など、絵具に求められる性能が一つでも欠けてしまうと、油絵具としての生命は失われてしまいます。ホルベインは6工程の顔料テストと4工程の製品テストを行い、油絵具になる前もなった後も、私たちの品質水準に達しているか厳しく審査します。健康な人が艶々して見えるように、絵具もバランスがとれているほど発色が生きてきます。ホルベインの命は品質です。

●20号チューブ(110ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都品川区東池田2-10-4 TEL.03(3982)9151 大阪府東大阪市上小島1-3-20 TEL.06(6722)1314



holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

加藤学

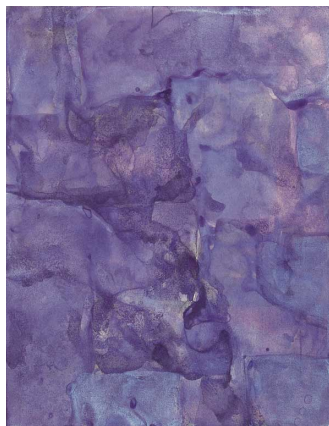
鷹見明彦 文 森田ケン 写真 * 即

鳥の眼に点在する〈山水〉を索めて_{もと}



1989年、東京・国分寺市のアトリエにて。就職したインテリア会社を辞めて、また絵を描きはじめた 撮影＝加藤花重

1990



「はじめから絵をやり直すつもりでした。ひとつずつの色彩で、自分の特質を探していこうと考えて」

無題 1990 キャンバスにアクリル絵具
41×31.8cm 撮影＝三好征紀

東京郊外のニュータウンが増殖を遂げたあたり。かつては「谷戸」とよばれた丘陵をぬって起伏する地形を、画家の車でしばらく走る。開発をまぬがれた丘の麓の借家をアトリエにして、十年ほどになる。照りつける夏日を映す小さな文机が目にとまる。小学生の頃から、ずっと捨てられずにいるという。

福島県の太平洋岸の城下町、相馬で育った少年は、野山を駆け巡る一方で、鳥たちの世話をするのが好きだった。「メジロ、ヤマガラ、ホオジロなど、二十羽以上も飼っていました。明け方に起きて餌やりを聴くのが日課でした」。

「子どもの頃のことでは他に思いだすのは、よく眼を怪我したことです。ものが飛び込んでくるまで、見つづけてしまう癖があったようで」。

山で遊んでいたら眼に松葉が刺さり、失明する恐怖に怯えたが、幸い回復した。しかし、両眼のピントが合いづらくなって、高一のときに

1993

「山水画の発展形として、
削ってはのせる工程に、
独自の〈風景画〉が模索できないかと」

無題 1993 キャンバスにアクリル絵具
227.3×181.8cm 個人蔵 撮影＝円山幸志



斜視の手術を受けた。

高校では、生物部で蛾の生態調査などをしていたが、美術の授業で、ペンで点描したリングの絵が先生の目にとまって、美術部に誘われた。「高三になって美大受験を考えたのですが、学校にあった石膏像は、宮城県沖地震で全部壊れて、お決まりの石膏デッサンは、描かなかった

ですね。」

上京して、浪人生活を続けながら大手の美術予備校から移った研究所で、うち解けあえる先生と出会えた。受験勉強ではない現代美術の演習に「何かの模倣ではなく、自分の考え方に従って表現すること」を教えられた。

一九八三年、多摩美術大学に入学。オルタナティブやノイズ・ミュージックに感化されて、制作とかけ持ちで音楽活動に励んだ。

「卒業が近づくにつれて、美術にも音楽にも、『こんな程度では、世の中にまかり通るわけではないな』と思ういとにかく就職することにした」。インテリア・デザインの会社で、テナントや住宅の内装の設計と施工管理の仕事をした。

《無題》（一九九〇）は、キャンバスにアクリル絵具でグリーンの地にブルーを重ねて描いた初期の作品。パブルの時期に忙しく働きながら、また絵を描きたいという思いが募って、ふたたび描きはじめた。「制作する

意志が固まるにつれて、仕事を続けながら絵を描く道もあるけれど、その時の僕にとっては、また中途半端に陥る怖れのほうが強かったのです。」

「それで会社を辞めることにしました。はじめから絵をやり直すつもりで。その時からですね。ひとつずつの色彩によつて、自分の特質を探していこうと考えるようになったのは、そのようにしてできた作品で、個展を開きはじめた。

《無題》（一九九二）は、キャンバスの作品とともに現在まで多く描いている紙のドローイングの一作。紙の作品には、移動する視点の現れに、景を追う画家の素地がのぞいている。



無題 1991 紙にアクリル絵具
54×42cm 撮影＝三好征紀



画眉 2004
キャンバスにアクリル絵具
227.2×181.8cm
撮影=末正真礼生
GALLERY TERASHITA蔵

2004

「鳥たちの眼が集めた景の数々を、一枚のキャンバスにおとし込む」

「子どもの頃の眼や小鳥の話ともつながるのですが、風景は、とらえようとした瞬間に動いています。鳥たちの眼のように、点在する無数の視点の重なりとして認知される風景があるのです」。

《無題》(一九九三)は、初期の作品で地に使っていたグリニッシュ・イエローやグリーン・イエローを基色にするようになった時期の作品。硫酸カルシウムとドウサの下地に、平刷毛とサンド・ペーパーで塗りと削除をくり返し、あいだの層を生みだしていく。こうした画法を進めたのは、風景がテーマになるにつれて、以前から関心があった山水画への傾倒が高じたためでもあった。

「室町美術にはじまり中国明代の浙派、そして北宋の李成、郭熙、五代董源などの山水画に満ちる、遙か聡明な静けさと厳しさ、そしてスケール感に打たれました」。

「水墨山水は、基本的には薄墨から墨をかさねることで生まれます。画材のちがいはあっても、山水画か

かとう・かく 1961年福島県生まれ。88年多摩美術大学絵画科卒業。97年第9回インド・トリエンナーレ（ニューデリー）に出品。2002-03文化庁在外研修で北京に滞在。

おもな個展に88、92年西瓜糖（東京）、90年藍画廊（東京）、91、94、98、00年なびす画廊（東京）、95年ギャラリー16（京都）、98、01、03年ギャラリー・アンドウ（東京）、04年GALLERY TERASHITA（東京）など。おもなグループ展は、93年「平行芸術展」（小原流会館・東京）、96年「VOCA展」（上野の森美術館・東京）、98年「現代美術展」（パッサージュ・ド・レッツ、パリ）、「福島の新世代98」（福島県立美術館）、03年「消残」（日本大使館文化センターほか、北京）など

八王子市・柚木のアトリエにて。自分でリフォームしたというまだ新しい床材が心地よい。年季のはいった文机は、小学生の時から使っている（＊）



らの発展形として、削ってはのせ、流してはのせる工程に、独自の「風景画」が模索できないかと。

二〇〇二年秋には、北京に留学する機会を得た。中央美術学院の山水画班に籍をおいて、画譜の模写と山峡へ写生に出かける授業にも参加した。「樹木、石、岩、山をへ書画同源」といわれる伝統的な合理性に則った作法で描きました。

元の画家の黄公望で名高い浙江省の富春江を訪ねたり、上海ペンナールと同時期に上海博物館で開かれた特別展では、晋唐宋元絵画の名作にも触れた。二〇〇三年が明けると、春先からSARSの感染が広がって、北京の街から人影が消えた。帰国要請が出て、五月に一時帰国。ほとぼりがさめた六月末に北京に戻って、日本大使館の文化センターなどでグループ展を開いてから帰国した。

《画眉》（二〇〇四）は、帰国後に制作した近作の一点。ある時期からは、刷毛の塗りと削りの作業に、工

芸化する傾向を感じて、筆を主として制作するようになった。

「硬めの筆でこりこり描いては、ブラシで消すことをくり返します。混入されたブロンズ系の絵具の光沢が、刷毛目の流れや筆跡と観る者の視線の移動によって、正面性だけではとらえきれない奥行きを生む。

「画眉」とは、小鳥のさえずりを愛でる風習がいまも残る中国の野鳥の名前。「定点からの景観認識ではなく、多視点からの風景の総体」。鳥たちの眼が集めた景の数々を一枚のキャンバスにおとし込む、とてもいったらいいのか……」。

刻々と変わる風景の、その現れと消滅の刹那に「景の理（ことわり）」を感じるといふ画家の言葉が、日の翳った丘陵にもどりはじめた鳥たちの声を近づけていた。

（二〇〇四年七月十四日、東京・八王子市柚木の作家アトリエにて取材）

◎ たかみ あきひ（美術評論家）